

# EMI参加に伴う学生のELFへの意識変化と ELF使用へのビジネスピープルの意識差の調査と 英語教育への示唆

村田久美子・小中原麻友・飯野 公一・豊島 昇

キーワード：英語を媒介とする授業（EMI）、ビジネス現場、共通語としての英語（ELF）、「英語」に対する意識

**【要 旨】** 近年、教育やビジネスを取り巻く環境の急速なグローバル化に伴い、日本でも英語及びその他の言語が使用される場面が増えている。高等教育分野でも、「グローバル人材」の育成を目的とするGlobal 30 Project (MEXT 2011) やTop Global University Project (MEXT 2014) などの導入を契機とし、学生や教員のモビリティが高まり、特に日本への留学生の伸びが目立つようになり、学部、大学院レベル双方で、EMI（英語を媒介とする授業）が採用されるケースが増加している。しかし、2015年度および2016年度の著者の調査で、このEMIでの‘E’つまり、そこで実際に使われる英語と英語教育がモデルとしてきた英語が必ずしも同一ではないことが明らかになった（村田・飯野・小中原 2017, 村田・小中原・飯野・豊島 2018）。本研究は、グローバル化深化の中で役割を増している共通語としての英語（English as a lingua franca – 以下ELF）使用の実態を、引き続き早稲田大学でEMIクラス受講の学生と仕事で英語を使用しているビジネスピープルの対象にした主に自由回答形式のアンケート調査で実施、この結果を今後の英語教育へ応用すべく提言を行うことを目指す。

上記調査で収集した回答は1）EMIで使用されている英語に対する学生の意識と、2）ビジネス現場での英語使用に対するビジネスピープルの意識に焦点をあて内容を質的に分析、精査した。学生の回答分析の結果、2016年度の教育学部英語英文学科の一部カリキュラム変更に伴う英語使用場面増加により、英語への苦手意識軽減の傾向が顕著になり、コミュニケーションの為の英語使用に慣れてきている様子が明らかになった（村田他 2018）。一方、英語母語話者の英語を規範とする意識は、無意識レベルながら根深い。また、ビジネスピープルの回答分析結果では、2016年度調査で若手ビジネスピープルに指摘された英語に対する意識の世代間差が、今回2017年度調査では世代間差というより、ELFでのビジネス経験差によることが明らかになった。最終章では、結論と本研究結果の教育的示唆について論じる。

## 1 はじめに

本研究は、EMI（English-Medium Instruction – 英語を媒介とする授業）の授業内における教員と学生、学生間の英語でのコミュニケーション実態の更なる解明、及び教育学部カリキュラム改革に伴うEMIコース増加とEMI経験増加による学生の共通語としての英語（English as a Lingua Franca – ELF）に対する意識変化調査（アンケート及びインタビュー）と英語を共通語として使用している多様な年齢層のビジネスピープルの意識調査を実施し、EMI教育が学生の英語及び

その使用に対する態度に与える影響とビジネスピープルの英語使用と英語への態度に与える影響を調査し、これに基づき、大学の英語教育の在り方を考え、将来グローバルに活躍する人材の育成に対応した英語教育への提言を目的とする。

2016年度の著者の研究部会補助による研究では、EMI授業体験増加の学生間で意識変化が観察された。例えば、EMI授業増加に伴うディスカッションや授業内での英語使用増加に好意的に言及する回答が増加した。一方、ビジネスピープルへの調査では、EMI教育を受けた比較的若い世代とそれ以前の世代で英語使用への意識差があることも判明した（村田他 2018参照）。

本研究では、EMI授業参加学生への更なるアンケート、インタビュー調査と授業観察・録画、及び分析、これに加え、多様な世代のビジネスピープルへのアンケート調査及びインタビューを実施した。EMI参加経験増加に伴う意識変化の追跡調査を学生及びビジネスピープルに対して行い、これに基づき、大学でのEMI教育の在り方を調査・考察、今後の英語教育への提言を試みる。

グローバル化の進行する中で、教育やビジネスの現場で英語が共通語として使用されることが益々増え、日本の高等教育分野でも、Global 30 Project (MEXT, 2011) や Top Global University Project (MEXT, 2014) などを通し、留学生が更に増加、また「グローバル人材」育成の掛け声のもと、大学でのEMI授業が奨励されている。しかし、このEMIでの「E」と関連する英語教育がこれまでの調査でも英語使用の実態に必ずしも即していないことが判明した（村田他 2017, 2018）。本調査では、グローバル化の中での共通語としての英語使用実態を大学とビジネスの現場で更に詳細に解明、真の「グローバル人材」育成の為の今後の英語教育への提言を行う。

以下、第2章ではまず、日本の高等教育におけるEMIと日本人ビジネスピープルの英語使用状況のコンテキストに焦点を当て議論する。続いて、本研究の調査方法、データ分析・考察をし、最後に結論と今回の研究結果の教育現場への示唆を論じる。

## 2 日本におけるEMIとELF使用

昨今のグローバル化の深化で共通語としての英語は、主として学術、ビジネス分野において英語母語話者とのコミュニケーションよりも非英語圏の人々同士の接触場面で使用されることが益々多くなっている。日本の高等教育でも、留学生増加と日本人学生のグローバル化対応の英語力増強を図り、EMI導入が奨励されている（MEXT 2011, 2014）。EMIは、「大多数にとって英語が第一言語ではない国や地域で専門科目を英語で教える」（Dearden 2014: 2, 4、著者訳）と定義されている。日本におけるEMIも学生や教員の多数が多様な非英語の言語文化背景を持つ状況でも実施されており（Murata and Iino 2018）、ここでコミュニケーションを達成する為に学生や教員が使用している「英語」、つまりEMIの「E」、はELF（共通語としての英語）である。しかし、この事実はこれまで明示的に議論されることがなく、英語母語話者の英語（ENL）を規範とする英語観でEMIによる教育も行われている傾向があることがこれまでの調査で示された（村田他 2017, 2018, Murata 2016 a, b, Murata and Iino 2018も参照）。

ELF使用は多文化・多言語化が進むビジネス現場でも顕著であり（Cogo 2016, 2018, Ehrenreich 2016等）、日本企業も例外ではない（Otsu 2017等）。日本国内でも労働者の出身背景が多文化・

多言語化しており、また自社工場の海外移転、従業員の海外配置をする企業も増えており、その多くはアジア圏が中心である（外務省 2016, 日本経済新聞 2016）。これは日本人ビジネスピープルがアジア圏の人々と「ELF」を使用して仕事をする機会が増加している可能性を示している（但し、Kubota 2016も参照）。だが、前述のEMIの「E」に対する記述同様、ビジネス現場で使用されている「英語」がELFであるという認識は一般的に低く（Murata 2016a）、また、実際の英語、現地語、日本語等を含む多言語使用の実態も明らかになっていない。ヨーロッパのビジネス現場でのELF研究は多く見られるが（Cogo 2016, 2018, Ehrenreich 2016等）、日本を含むアジア圏での同様の研究はまだ少ない。

本稿では、EMI受講の学生と、仕事で英語を使用するビジネスピープルを対象にした主に自由記述形式アンケート調査を実施、回答内容を質的に分析、ELF使用実態を詳細に解明、これを踏まえて今後の英語教育への提言を行う。まず、次に今回の調査内容と結果を論ずる。

### 3 調査内容と結果

#### 3.1 調査対象、および方法

本研究では、学生とビジネスピープルそれぞれを対象としたアンケート2種類を実施した。回答データはその内容を質的研究ソフトNVivo 10及びエクセルを使用し、質的に分析した。以下にそれぞれのアンケート調査の詳細を簡潔に説明する。

##### 3.1.1 学生を対象としたアンケート調査

早稲田大学において一部科目でEMIを実施している教育学部（特に英語英文学科）（以下EMIコース）と、学部全体でEMI実施の国際教養学部および国際文化コミュニケーション研究科（以下両者を纏めEMIプログラム）教員の協力を得、EMI授業を履修している学生を対象に2017年7月、及び10月にアンケート調査を実施した。

アンケートはデータ収集の便宜性を考慮、Google Form使用でオンライン・アンケートを作成した（一部紙ベースでも対応）。EMI実施状況が異なる学部の学生が対象であることに加え、EMIプログラムでは日本人と留学生双方の回答を考慮、アンケートは日本語と英語で計3種類作成した。主な調査項目は、1）EMIに対する意識と2）EMIの授業で使用されている「英語」に対する意識の2つであるが、対象コース・プログラムに応じて質問項目数を調整、EMIコースは13項目、EMIプログラムは8項目の質問を設定した。詳細な意見を引き出すため、項目の多くは回答形式を自由記述とした。

アンケート実施に際しては、授業担当教員へ依頼したり、研究協力者が事前に許可を取り実施教室に赴き、直接実施したりした。その結果、EMIコース125名、EMIプログラム38名、合計163名の学生から回答を得た。回答者の内訳は表1の通りである。

分析中に扱う学生情報提供者の名前は、匿名性を維持するため、以下の情報提供者コードで提示する（EMIコース・プログラム別、コース／プログラムの情報提供者の回答順番、学年、国籍、第一言語、海外経験の有無とその滞在先と年数、小中高校での英語で英語科目や他の科目を学習した経験の有無の組み合わせ）。EMIコース・プログラムの別は、EMI-CとEMI-P、学

表1. EMIコース、EMIプログラムの回答学生の背景の内訳

	EMIコース学生		EMIプログラム学生	
	N (%)	出身国 (N)	N (%)	出身国 (N)
日本人学生	117 (93.6%)		32 (84.2%)	
留学生	3 (2.4%)	フィリピン (1)、台湾 (1)、 中国 (1)	6 (15.8%)	アメリカ (3)、中国 (1)、 韓国 (1)、フランス (1)
不明	5 (4%)	出身国不明		
合計	125 (100%)		38 (100%)	

年は学部1年～4年をそれぞれU1～U4、国籍は英語の国コード、第一言語は言語名の頭3文字（但し日本語はjpnで表示）、海外滞在の有無はYあるいはN、滞在国は国コードで示し、例えば「EMI\_C173-U3-JP (jpn) -N-Y」はEMIコースの173人目の回答者、学部3年、日本出身日本語母語話者、留学未経験、小中高において英語で英語あるいは他の科目を学習した経験ありの学生となる。

### 3.1.2 ビジネスピープルを対象としたアンケート調査

仕事で英語を使用する日本人ビジネスピープルを対象とした本調査では、著者2名の元学生である早稲田大学卒業生に加え、著者と交流があるビジネスピープルも含め、メールで調査への参加依頼を実施した。日本人対象の調査であった為<sup>1</sup>、アンケートは日本語で作成、また、データ収集の便宜性を考慮し、Google Formを使用しオンライン・アンケートを作成した。仕事の中の英語使用に関する意識や意見を問う質問を中心に11項目を設定、詳細な意見を引き出すため、主に自由記述回答形式とした。

アンケートは、2017年12月、2018年1、2月に実施、実施はメールでオンライン・アンケートへのリンクを送信する形式を採用、その結果、計24名（民間企業18、教育機関3、国際機関3）からの回答があった。回答者の年代内訳は、20代41.7%、30代45.8%、50代12.5%（回答当時；表2参照）であり、回答者の12.5%は外国人（インドネシア1名、中国1名、台湾1名）であった。また、回答者のうち20.8%（N=5）はEMIプログラム卒業生、45.8%（N=11）はEMIコース（一部の科目を英語で履修）経験者、33.3%（N=8）はEMI科目の履修経験がなかった（表2参照）。更に、ビジネスピープルを対象に2017年12月、2018年1、2月にビジネス現場におけるELF使用についてインタビュー調査を実施したが、こちらのデータは今後の追加調査及び分析を待って発表する予定で、基本的に本論には含めない。

分析中に扱うビジネスピープルの情報提供者の名前は、学生のアンケート調査同様、匿名性維持の為、情報提供者コードで提示する（回答者の人数、年齢（年代）、最終学歴の別（学部U、

1 結果として日本で働く元EMIプログラム留学生3名の協力も得た。

表2. ビジネスピープル回答者の年代とEMI履修経験 (N=24、少数第2位以下四捨五入)

EMI経験種別	年 代						合 計	
	20代		30代		50代			
EMI (N) EMI履修経験なし	2	8.3%	4	16.7%	2	8.3%	8	33.3%
EMI (Y-all) EMIプログラム卒業生	3	12.5%	2	8.3%	0	0%	5	20.8%
EMI (Y-partially) EMIコース経験者	5	20.8%	5	20.8%	1	4.2%	11	45.8%
合 計	10	41.7%	11	45.8%	3	12.5%	24	100%

今回のアンケート調査の回答者は20代、30代、50代のビジネスピープルであった。

修士M、博士D)、国籍、第一言語、企業の種類別（日本企業C(J)、外資系企業C(F)、日本の高等学校HS(J)、日本の大学Uni(J)、国際機関・役所等IO)、出張(BT)や駐在(BS)、留学(SA)の海外経験の有無(Y/N)とその滞在先と年数の組み合わせ)。国籍は英語の国コード、第一言語は言語名の頭3文字、滞在国は国コードで示し、例えば「BP22-20-U-JP(jpn)-C(F)-BT(N-N/A)-BS(N-N/A)-SA(Y-CA10m, CN12y)」はビジネスピープル22人目の回答者、20代、学部卒、日本出身の日本語母語話者、外資系企業勤務、海外出張および駐在経験はないが、カナダに10ヶ月、中国に12年の留学経験ありとなる。以下の項では、アンケートの主要項目の分析、考察をする。

### 3.2 調査結果、および考察

本項では、1) EMIとそこでの英語使用に対する学生の意識と2) ビジネス現場での英語使用に対するビジネスピープルの意識について、その分析結果を紹介する。なお、本研究プロジェクトは、今回2017年度調査で学生の意識調査は3年目、ビジネスピープルの意識調査は2年目となる。よって、適宜、前年度までの調査結果と照らし合わせつつ、前者1)の調査結果については、特に2016年度のEMIコース（主に教育学部英語英文学科）の一部カリキュラム変更に伴うEMIコースの学生（以下、EMIコース学生と表記）の意識変化に焦点を当て、後者2)の調査結果については、2016年度の調査結果との比較に焦点を当て、分析結果を検討していく。

#### 3.2.1 EMIとそこでの英語使用に対する学生の意識

EMIへの学生の意識を分析した結果、EMIコース、EMIプログラムの双方において2015、2016年度までの調査結果と同様に、肯定的な意見が大多数であった。特に、2016年度のEMIコース、特に教育学部英語英文学科の一部カリキュラム変更に伴う英語使用場面の増加により、英語への苦手意識軽減傾向が顕著になり、コミュニケーションの為の英語使用に慣れてきている様子が覗える。しかし、一方で、英語母語話者の英語(English as a native language; 以下ENL)を規範とする意識は、無意識ではあるが、まだ根深いことも明確となった。以下、具体的な学生の回答等を提示しながら、議論を進める。

まず、EMIに対する意識の全体的傾向であるが、2015～2017年度いずれの調査においても、EMIコースとEMIプログラムの双方で、肯定的な意見がその大多数を占めた（表3参照）。

表3. 2015年度、2016年度、2017年度回答比較：EMIに賛成か

	EMI コース			EMI プログラム		
	2015	2016	2017	2015	2016	2017
賛成	51% (39)	52% (103)	58% (73)	62% (24)	46% (19)	42% (16)
やや賛成	38% (29)	29% (58)	31% (39)	31% (12)	41% (17)	55% (21)
やや反対	9% (7)	14% (28)	10% (12)	8% (3)	7% (3)	3% (1)
反対	1% (1)	4% (7)	1% (1)	0% (0)	5% (2)	0% (0)
無回答		1% (2)				
合計	100% (76)	100% (198)	100% (125)	100% (39)	100% (41)	100% (38)

表3に見られるように、EMIコース・プログラム共に、3年連続で80～90%程度の学生がEMI実施に賛成している。また、EMI実施に賛成する理由（EMI\_C&P-Q2）を2017年度の調査結果で具体的に見てみると、前年度までの調査同様（村田他 2017, 2018参照）、EMIプログラムの学生間（以下、EMIプログラム学生と表記）でより多様な意見が挙げられた。以下にその代表的な意見を提示する。

#### EMIプログラム学生の意見

##### ■英語環境の提供

「英語を使うことが日常的になる」(Q2: EMI\_P06-U3-JP (jpn) -Y (IE1) -N)

##### ■専門内容の学習

「英語で知識の幅を広げられる点」(Q2: EMI\_P20-U4-JP (jpn) -Y (US1) -N)

##### ■国際競争力の向上

「専門科目を英語で学ぶことで、日本だけでなく世界で活躍できる力をつけることができる可能性が高くなる場所」(Q2: EMI\_P15-U3-JP (jpn) -N-N)

##### ■多様性

「より多様な価値観を持つクラスメートと交流できる」(Q2: EMI\_P13-U4-JP (jpn) -Y (US1) -N)

上記のように、「英語環境の提供」や「専門内容の学習」、「国際競争力の向上」、クラスメートの「多様性」を評価する意見など、「英語力向上」以外にも多様な意見が、EMI実施の賛成理由として挙げられた。

一方、EMIコース学生間では、前年までの調査同様、「英語力向上」がEMI賛成理由として多く挙げられた。前述の通り、EMIコース、特に英語英文学科では、2016年度の一部カリキュラム変更でEMIクラスの開講数が大幅に増加した。2016年度調査では、このカリキュラム上の変

更に伴い、EMI実施に賛成する学生の意見にも質的な変化が見られ、より具体的に「リスニング力の向上」を評価する意見や、「英語を話す／使用する機会が増えた」ことを評価する意見があり、また、英語使用機会の増加により「英語が使えるようになる」と肯定的な評価をする意見も見られた（村田他 2018参照）。新カリキュラム実施2年目の今回（2017年度）の調査でもこの傾向が更に顕著になっている。

例えば、EMIクラス開講数増加に対する学生の意見は肯定的なものが多い。図1は、EMIクラス開講数増加に対するEMIコース学生の意見の内訳を示したものである。

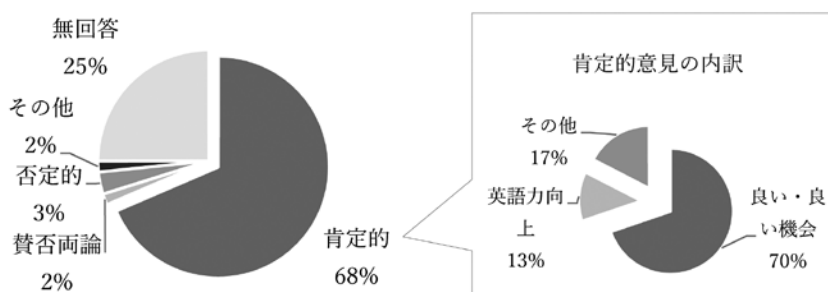


図1. EMIクラスの開講数の増加についての意見 (EMI\_C-Q8)

図1のように、68%のEMIコース学生がEMIクラス数増加に肯定的で、その内訳を詳しく見ると、70%がEMIを「良い・良い機会」であり、13%が「英語力向上」と述べている。前者の意見には、単に「良いと思う」と述べたものが多かったが、中には、「英語でのコミュニケーションが増えることは良いことだと思う」(EMI\_C84-U1-JP (jpn)-N-Y) という英語使用機会増加を評価する意見や、「自分の興味のある授業が取れていいと思う」(EMI\_C73-U1-JP (jpn)-N-Y) というEMIクラスでの授業選択幅の広がり进行评估する意見も見られた。

また、EMI授業増加に伴い、英語での意見交換や発言に変化が起きたとする学生も多い（図2参照）。

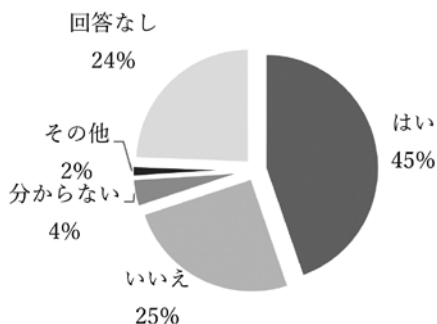


図2. EMI授業の増加により英語による意見交換や発言に変化は見られるか (EMI\_C-Q9)

図2のように、45%のEMIコース学生が、英語での意見交換や発言に変化が見られたと回答、その回答内容を具体的にみると、「英語力向上」や「英語への苦手意識軽減」を挙げる意見が多

く見られた。以下に代表的な意見を提示する。

■EMIコース学生意見：英語による意見交換や発言に変化は見られるか (EMI\_C-Q9)

- ・「はい。ミスしても誰も気にしないのでますます自信つきました。英語力上がってる [原文ママ] と思います」(Q9: EMI\_C93-ENG-U4-JP-jpn-Y (US1) -N)
- ・「羞恥心やミスに対する恐れが減ったように思う。[…]
- ・「英語でディスカッションすることや発表することに抵抗がなくなった。英語を使わなければいけないから」(Q9: EMI\_C112-ENG-U1-JP (jpn) -N-Y)
- ・「変化は見られると思う。[…] 話す機会を増やすことで、あまりなかった場合と比べてより臆することなくコミュニケーションをとることができるからである」(Q9: EMI\_C125-ENG-U1-JP (jpn) -N-Y) (太字強調、著者)

このように、EMIクラス開講数増加に伴い英語使用機会も増加し、学生がクラス内コミュニケーションで英語使用経験を積み重ね、これにより「ミス」を恐れず積極的に英語を使用、英語使用にも自信が付いたという自己評価をするに至ったことが推測できる。

これはカリキュラム一部変更前に実施した2015年度調査結果と比較すると大きな変化である。図3は、2015年度から2017年度の3年間にわたるEMIコース学生のEMIに対する意識の変化をまとめたものである。

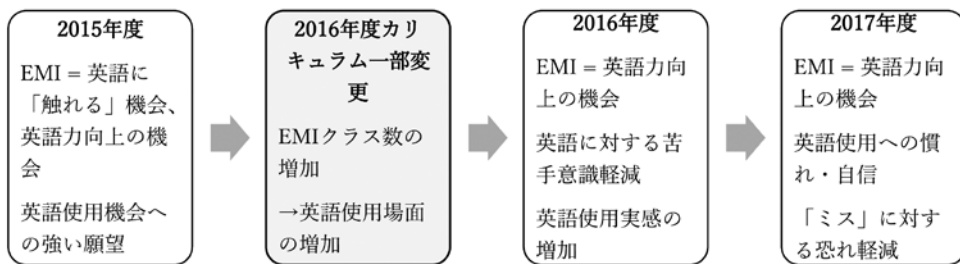


図3. EMIコース学生のEMIに対する意識の経年変化 (2015年度～2017年度)

EMIクラス開講数が少なかった2015年度調査ではEMIコース学生はEMIを英語を「使用する」というより、英語に「触れる」機会であると、やや受動的に捉え、一方で英語使用機会への強い願望を持っていた (詳細は村田他 2017を参照)。2016年度のカリキュラム変更でEMIクラス開講数が増加、これに伴い英語使用場面が増え、2016年度調査では、前述の通り、英語に対する苦手意識軽減や英語使用実感の増加を指摘する意見が見られるようになった (村田他 2018参照)。今回2017年度調査では、2016年度の傾向が更に顕著になり、英語使用への慣れや自信、実際のコミュニケーションでの「ミス」に対する恐れ軽減を述べる意見が観察された。このように、EMIコース学生のEMIに対する意識、特に自身の英語使用に関する意識が、一部の学生間において、英語母語話者規範に過度に囚われず、相互理解や効果的コミュニケーションを重視す



るELF志向的な意識 (Jenkins et al. 2011, Seidlhofer 2011等を参照) に徐々に変化していることが伺える。

しかし一方で、EMIを「英語力向上の機会」として捉える傾向も依然として強い (図3参照)。2016年度調査結果を論じた村田他 (2018) でも指摘したことだが、圧倒的に日本人学生や教員が多く、外国人学生・教員は日本語にも堪能であるというEMIコースの環境では、学生が英語で専門科目を学ぶ意義や必然性を理解することは難しく、EMI実施の意義を「英語力向上の機会」とし、「外国語としての英語」科目の延長として捉える傾向があると推測される。EMIクラス開講数増加に伴い英語での専門科目受講の選択肢は広がり、その点を評価するEMIコース学生は前述のように増えたが、より有意義にEMIを実施するには、学生および教員間の言語文化背景の多様性が望まれる。

ここまで、特にEMIへのEMIコース学生の意識を中心に議論してきたが、次はその焦点をEMIでの英語使用自体に移して議論を進める。先程、EMIコース学生自身の英語使用への意識が一部の学生間でEMIクラスでの英語使用経験を通しELF志向的に徐々に変化していることを紹介した。この傾向は、自分の英語 (EMI\_C-Q7) や教員の英語 (EMI\_C-Q5) についての意識を問う質問への回答でも確認できる。以下に代表的な意見を提示する。

#### ■自分の英語に対するEMIコース学生のELF志向的意見 (EMI\_C-Q7)

- ・『「英語母語話者」のような英語ではないが、自分の言いたいことを伝えられるので、不満なくコミュニケーションを図れる」(Q7: EMI\_C53-M1-JP (jpn) -Y (NZ1) -N)

「自分の言いたいことを伝えられる」や「コミュニケーションを図れる」に見られるように、上記意見では相互理解の達成が重要視されており、ELF志向的な意見であると言える。同様の傾向は、以下の教員の英語に対する意見にも見ることができる。

#### ■教員の英語に対するEMIコース学生のELF志向的意見 (EMI\_C-Q5)

- ・「再度不明点を確認してくるので理解しやすい」(Q5: EMI\_C22- U3-JP (jpn) -N-Y)
- ・「経歴があるため信頼できる。日本人らしい英語で聞き取りやすい」(Q5: EMI\_C15-U4-JP (jpn) -N-N)

上記1つ目の意見では、「不明点を確認してくる」や「理解しやすい」に見られるように歩み寄り方略 (accommodation strategies) の使用と理解し易さ (comprehensibility) が重要視され、2つ目の意見でも「聞き取りやすい」に見られるように分かりやすさ (intelligibility) が重要視されている<sup>2</sup>。同時に、「日本人らしい英語」とENL (English as a native language; 母語話者英語)

2 Intelligibilityとcomprehensibilityは研究者により定義は異なるが、ここでは回答者自身のことばを用い「理解しやすい」をcomprehensibility、「聞き取りやすい」をintelligibilityとして、説明した。この解釈はSmith (2009: 17) に近いものである。

ではない英語を肯定的に評価している点も注目に値する。

上記一連のコメントは、EMIクラス数増加で、学生は実際に英語を聞いたり話したりする経験が増え、その経験を通し徐々にコミュニケーションで重要な「文法的な正しさ」や「ネイティブのような発音」ではなく「如何に分かりやすく伝えるか」であることを理解するに至っている可能性を示しており、EMIを通してコミュニケーションの為に英語を使用する機会を多く設けることの重要性を示唆している。

一方で、ENLへの志向も、一部の学生間において依然として根強く見られる。以下に代表的な意見を提示する。

#### ■自分の英語に対するEMIコース学生のENL志向的意見 (EMI\_C-Q7)

- ・「発音に自信がない」(Q7: EMI\_C120-U1-JP (jpn) -N-N)

上記のコメントで学生は、なぜ「発音に自信がない」のか明確には述べていない。しかし、教員の英語への意見において、「nativeでなくてもとても流暢な英語を話すので、自分もそうなりたいと思う」(Q5: EMI\_C120-U1-JP (jpn) -N-N)と述べており、このことから、上記の自分の英語に対する意見でも、暗に自分の発音をENL発音と比較して否定的に評価していることが分かる。ネイティブ規範の評価は、教員の英語に対する意見でも以下のように見られる。

#### ■教員の英語に対するEMIコース学生のENL志向的意見 (EMI\_C-Q5)

- ・「ネイティブ並みに英語がうまい教員なので勉強になる」(Q5: EMI\_C99- U2-JP (jpn) -N-Y)
- ・「先生によって英語力の差がある、日本語英語は為にならない」(Q5: EMI\_C87-U4-JP (jpn) -Y (CA3) -Y)
- ・「聞き取りにくい英語を話す先生もいて困っている」(Q5: EMI\_C18-U3-JP (jpn) -N-N)

上記最初の2つの意見、「ネイティブ並みに英語がうまい」と「日本語英語は為にならない」には、「ネイティブあるいはネイティブ並み=良い」、「日本人的な英語を含む非ネイティブ英語=悪い」という典型的なネイティブ志向の図式が見られ、英語がELFとして非母語話者にも広く使用されているという意識の欠如を露呈している。一方、3つ目の「聞き取りにくい英語」で「困っている」という意見は、聞き取りにくさがどの程度発音によるのか、またその他の要因も含め、更なる調査は必要ではあるが、この背景には、長年ENL、特にアメリカ英語一辺倒の英語教育を受けてきた学生がそれ以外の英語に慣れておらず聞き取りに困難を来しているという可能性があることも示している。教員の方でもより分かり易くする工夫をする必要もあるが、それと同時に学生の方にも多様な英語に対するリスニング力をつける必要があると言える(Konakahara et al. 2018, 村田他 2018も参照)。

ここまでEMIでの英語使用へのEMIコース学生に見られるELF志向的意識とENL志向的意識をそれぞれ見てきたが、この2つの相反する意識は二者択一のものではなく、図4のようにむしろ連続体として混在する状態であると考えられる。

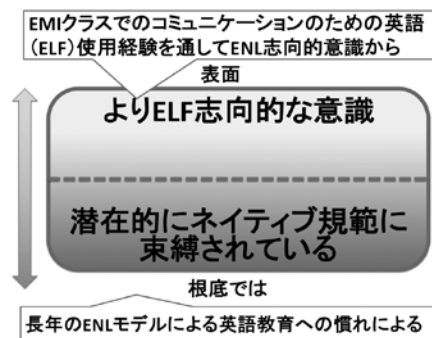


図4. EMIコース学生の英語に対する意識

図4に示したように、個人差こそあれ、EMIクラスでのコミュニケーションの為の英語（ELF）使用経験を通しENL志向的意識からよりELF志向的な意識へと徐々に変化してはいるが、その根底は依然としてネイティブ規範に囚われていることが多いと言える。

このように2つの相反する意識が混在する状態は、EMIコース学生間だけでなく、学部全体でEMIを実施するEMIプログラム学生間でも観察される。教員の英語に対する意見を例に、以下に代表的な意見を提示する。

#### ■教員の英語に対するEMIプログラム学生のENL志向的意見（EMI\_P-Q4）

- ・「多くの先生方は英語が流暢なため、ネイティブの先生方と差がない」（Q4: EMI\_P06-U3-JP (jpn) -Y (IE1) -N)
- ・「英語が得意な先生もいれば、日本語訛りの英語でたまに聞き取りにくい先生もいる」（Q4: EMI\_P01- U3-JP (jpn) -Y (SG12) -Y)

前述のEMIコース学生達の意見と同様に、「ネイティブあるいはネイティブ並み＝良い」、「日本人的な英語を含む非ネイティブ英語＝悪い」というネイティブ志向の図式がここでも見られる。2015年度の調査結果では、特に英語圏、および非英語圏からの帰国子女や、留学を終えて帰国したばかりのEMIプログラム学部3年生に否定的な評価が多く見られたが、同様の傾向がここでも見られる（詳細は村田他 2017参照, Ball and Lindsay 2013, Gundermann 2014, Ljosland 2011等も参照）。一方、こちらも前年度までの調査同様、ELF志向的な意見も留学生を中心に見られる（村田他 2017, 2018参照）。

#### ■教員の英語に対するEMIプログラム学生のELF志向的意見（EMI\_P-Q4）

- ・“I can understand my lecturer’s English without any difficulties.” (Q4: EMI\_P34-U3-CN (chin) -N-Y)
- ・“All professors that teach EMI courses speak fluent English, though some have accents depending on where they’re from (which is fine)” (Q4: EMI\_P31- Exchange-US (eng) -N-Y)

1つ目の意見は中国からの留学生によるものだが、教員の英語を難なく理解できると肯定的に評価している。2つ目の意見はアメリカからの交換留学生のものであるが、EMIクラスを担当する教員は全員英語を流暢に話すとし、出身国によってアクセントはあるがそれは問題ないとしている。これらの意見には、分かりやすさの重視と多様な英語に対する理解と寛容性が見られる。

上記一連のコメントで観察されたように、EMIクラス開講数が増加し英語使用場面が以前より増えたEMIコースにおいても、学部全体でEMIを実施しているEMIプログラムにおいても、ELF志向的意識とENL志向的意識の相反する2つの意識が混在している。これは、EMIクラス内での英語使用経験を通して相互理解や効果的なコミュニケーションを重視するELF志向的な意識が培われる側面もある反面、英語の評価基準として教育の現場で長年慣れ親しんできたENLがその根底に根強くあることを示していると考えられる。過度にネイティブ規範に捉われることは、英語に対する苦手意識に繋がり、EMIにおける内容学習とそれに付随する英語学習を阻害する恐れがある。EMIを通して英語使用場面を多く設定すると同時に、入学時のオリエンテーション等で、ELFとWorld Englishesの視点からグローバル化社会における英語の位置付けについての理解を深める機会を設けること等も無批判的なENL志向に陥らないための解決策として必要であると考えられる（村田他 2017, Murata & Iino 2018も参照）。

ここまで学生対象のアンケート調査結果について論じてきたが、次章ではビジネスピープルへのアンケート調査結果を紹介する。

### 3.2.2 ビジネス現場での英語使用に対するビジネスピープルの意識

ビジネスピープルの回答を分析した結果、学生のアンケート調査結果と同様、英語に対する2つの相反する意識、つまりENL志向的意識とELF志向的意識が見られた。この傾向は2016年度実施の同様のアンケート調査でも見られたが、2016年度の調査では、ビジネスピープルの中でも若手と年上の世代間に英語に対する意識差があり、後者がよりENL志向的であることが若手ビジネスピープルにより指摘された。これに対し今回2017年度調査では、世代間の差よりELFでのビジネス経験の差が大きいことが判明しつつある。つまり、ELFコミュニケーションの経験を積む程、ELF志向的になる傾向があることを示唆しており、先述のEMIの調査結果とも共通している。以下、これらの点について具体的なビジネスピープルの回答等を提示しながら議論を進める。

はじめに2016年度の調査結果について、前述の世代差に絞って簡単に振り返る。2016年度調査結果では概してビジネスピープルの方が学生よりELF志向的な意見が多かった。しかし、ビジネスピープル間でも、EMIでの教育を経験した若い世代と最近のグローバル化加速以前に雇用された年上世代の間で、英語への意識差があり、後者の方がよりENL志向的であることが、情報提供者の多くを占める若い世代のビジネスピープルにより指摘された（詳細は村田他 2018参照）。以下に代表的な意見を提示する。

### ■ 2016年度調査結果：ENL志向的な年上世代

- ・「[…] 自分の英語に自信がなさすぎる人が多いと感じます。(正しい英語、充分伝わる英語を使っているのに、自分の英語はネイティブじゃないから、間違っているところを教えて、と仰います。)[…]」(2016-Q7: BP14-20-U-JP (jpn)-C (J)-BT (N-N/A)-BS (N-N/A)-SA (Y-US4.5y, CA1y))

上記回答の情報提供者は、EMI教育を受けた20代のビジネスパーソンである。「正しい英語」という表現が示すように、この回答者自身もまだ無意識のうちに幾分か英語母語話者の規範に囚われているが、相互理解の重要性にも気付いており、年上の同僚が母語話者規範に基づいた英語の正しさに、より囚われ、英語使用に自信がないと指摘している。当該者である年上世代が直接述べてはいない為、この差が世代間によるものか、EMI教育経験有無の差によるものかを解明する為に、今回2017年度の調査はより幅広い年代層のビジネスピープルの調査対象にした。

この2017年度調査結果を分析して明らかになったことは、英語に対する意識の違いは世代差やEMI教育経験有無の差というより、ビジネス現場でのELF使用経験の差ではないかという点である。これは、(1) ELF志向的意见は、どの世代のビジネスピープルの回答にも見られたこと、そして(2) ENL志向的意见は、若手である20代の回答でも、それより年上世代の30代のビジネスピープルの回答にも見られたことによる。以下、上記2点について、具体的な回答を示しながら検討する。

まず、1点目のELF志向的意见は、以下の代表例にあるようにどの世代のビジネスピープルの回答にも観察された。アンケート調査の回答者背景情報に関する質問(海外出張経験、海外駐在経験、留学経験、EMI教育を受けた経験の有無、英語使用場面と使用する相手)回答による情報では、各人毎にビジネスや高等教育での英語使用経験に幅はあるが、概していずれの年代層もビジネスで英語を共通語として使用した経験がある。以下、年代の高い順に見ていく。

### ■ 50代のビジネスピープルのELF志向的意见

- ▶ 回答者1 (BP3-50-U-JP (jpn)-IO-BT (Y-Various\*4/y)-BS (Y-US6)-SA (N)-EMI (Y-partially))
  - ・自身の英語 (Q5): 「言いたいことは伝わる、微妙なニュアンスを表現するのは難しい」
  - ・仕事相手の英語 (Q6): 「いろいろな英語」
  - ・同僚の英語 (Q7): 「わかりやすい」
- ▶ 回答者2 (BP4-50-U-JP (jpn)-C (J)-BT (Y-Various\*several/y)-BS (N)-SA (N)-EMI (N))
  - ・自身の英語 (Q5): 「ブローケンであるが通じる程度」

上記回答者1は、国際機関・役所で働く50代日本人ビジネスパーソンで、様々な国への海外出張経験とアメリカでの駐在経験があり、一部科目でEMIによる教育を受けており、仕事での英語コミュニケーション相手は「ネイティブ、非ネイティブ」(Q2)であるとしている。一方、回答者2は日本の民間企業で働く50代日本人ビジネスパーソンで、様々な国への海外出張経験はあるが、海外駐在経験、留学経験、EMIによる教育を受けた経験はない。仕事での英語コミュニ

ケーション相手は「英語ネイティブスピーカー（英語、米語、オーストラリア英語）」(Q2)であると回答している。

この両者は英語使用経験に質・量的差こそあれ、回答内容にはELF志向的意識が垣間見られる。回答者1は自身、仕事相手、及び同僚の英語への意見で、相互理解に繋がる分かりやすさ（「言いたいことは伝わる」と「わかりやすい」）を重視すると同時に、英語の多様性についての理解（「いろいろな英語」）も示している。一方、回答者2の自身の英語への意見は、「ブローケンであるが通じる程度」とあり、「ブローケンであるが」という表現に無意識レベルでのENL志向が見られるが、「通じること」、つまり相互理解を重視している点で、よりコミュニケーションに重点をおいたELF的志向を示していると言える。

上記と同じような傾向は30代ビジネスピープルの回答にも見られた。以下にその代表的な回答例を示す。

#### ■30代のビジネスピープルのELF志向的意見

- ▶ 回答者3 (BP19-30-U-JP (jpn) -C(J)-BT(Y-\*1/y)-BS(Y-US2.5)-SA(Y-US1-university)-EMI (Y-partially))
  - ・自身の英語 (Q5) : 「意思疎通、議論可能」
- ▶ 回答者4 (BP8-30-M-TW (chi) -Uni(J) -BT(Y-Various\*2/y) -BS(N) -SA(Y-JP-20s) -EMI (Y-partially))
  - ・自身の英語 (Q5) : 「更に多様な人と話し出来て良いと思います」(原文通り)

上記回答者3は、日本の民間企業で働く30代日本人ビジネスパーソンで、海外出張の経験は年1回程度、アメリカでの海外駐在経験が2年半あり、学部時代に1年間のアメリカ留学経験と一部科目でのEMIによる教育経験がある。仕事で英語は「第二外国語使用者と話す」(Q2)と回答している。一方、回答者4は、日本の大学で働く30代の台湾出身のビジネスパーソンで、様々な国への海外出張経験はあるが、海外駐在経験はなく、20代から日本に留学、一部科目においてEMIでの教育経験（修士課程修了）がある。仕事での英語コミュニケーション相手は「留学経験や外国で英語を使用する必要がある人に対して」(Q2)と回答している。両者とも程度の差こそあれ、高等教育と仕事双方において英語使用経験がある。回答者3は「意思疎通、議論可能」と相互理解を重視し、回答者4は英語によって「多様な人と話し」ができると、共通語としての英語(ELF)の役割に対する理解を示している。

同様に20代のビジネスピープルもELF志向的な意見を示している（以下参照）。

#### ■20代のビジネスピープルのELF志向的意見

- ▶ 回答者5 (BP17-20-U-JP (jpn) -C(J) -BT(N) -BS(Y-N/A) -SA(N) -EMI(N))
  - ・仕事相手の英語 (Q6) : 「共通言語として有益」

上記回答者5は、日本の民間企業で働く20代ビジネスパーソンで、海外出張経験はないが、海

外駐在経験はある（但し、国・期間について明記なし）。一方、留学経験やEMIによる教育経験はないが、日々の仕事や海外駐在経験を通して英語を使用し、仕事での英語コミュニケーション相手は「アイルランド人（ネイティブ）、中国人」（Q2）であるとしており、仕事相手の英語に対し「共通言語として有益」と回答している。回答に曖昧さは残るが、「共通言語」として使用される英語の「有益」性、つまり、ELFとして相手との意思疎通を図ることができる点を評価していると考えられ、ELF志向的な意見であると言える。

ここまでELF志向的な意見を紹介してきたが、ENL志向的な意見についても、若手である20代とそれより上の世代である30代のビジネスピープルの回答に観察された。以下、先程と同様に各人の英語使用経験に注目しつつ、年上世代から順に代表的意見を提示する。

### ■30代のビジネスピープルのENL志向的意见

- ▶ 回答者6 (BP10-30-M-JP (jpn) -C (F) -BT (Y-EU, RU, Various\_Africa1d-1w\*2/m) -BS (N) (-SA (Y-UK7-childhood, UK1-graduate school) -EMI (Y-partially))
  - ・自身の英語 (Q5) : 「アクセントがないため、ネイティブのように聞こえるようで怒涛のように相手が話して来るが、たまにボキャブラリー不足を感じる。またアクセントがある英語が聞き取りづらい」
- ▶ 回答者7 (BP9-30-M-CN (chi) - (J) C-BT (Y-N/A) -BS (N) -SA (N) -EMI (Y-partially))
  - ・仕事相手の英語 (Q6) : 「相手の母語が英語であったら、もしくは発音が分かりやすいかたであったら、より聞き取れるので、話しやすいと思います」

上記回答者6は、外資系企業で働く30代日本人ビジネスパーソンで、欧州各国やアフリカ諸国等に出張経験はあるが、駐在経験はないとしている一方、「同僚とのコミュニケーション」(Q1)で英語を使用し、そのコミュニケーション相手は「ネイティブから英語が母国語でない人まで」(Q2)と回答している。また、この回答者は幼少期と大学院時代にKachru (1985, 1992)のいわゆる内円圏 (the Inner Circle) に滞在経験があり、一部科目でEMI教育を受けた経験もあり、比較的長期にわたり英語を使用する環境にいる。仕事では外円圏 (the Outer Circle) や拡大圏 (the Expanding Circle) (Kachru 1985, 1992) 諸国にも出張しているが、内円圏での滞在が長かった為か自身の英語を「アクセントがないため、ネイティブのように聞こえるよう」だと判断されると説明、且つ「アクセントがある英語が聞き取りづらい」と多様な英語への不慣れに言及しており、ここでのアクセント有無の基準はENL発音であると判断できる。

一方、回答者7は、日本の民間企業で働く30代の中国出身ビジネスパーソンで、海外出張経験はある（但し、場所と期間の明記なし）が、駐在経験と日本以外への留学経験はなく、一部科目においてEMIによる教育経験がある。仕事での英語コミュニケーション相手は「インドの方が多い。あと、中国・台湾の業務委託の方との英語コミュニケーションが多い。ほぼ日本語でできない方です」(Q2)と回答し、日頃からアジア諸国出身の同僚や仕事相手と英語 (ELF) でコミュニケーションを取っていることが分かる。仕事でのELF経験が豊富であると見られるこの回答者であるが、仕事相手の英語への意見では、「母語が英語」あるいは「発音がわかりやすいかた」

であれば聞き取りやすく話しやすいと回答しており、多様な英語に対して不慣れを示すと同時に、分かり易さの判断基準はやはりENLとなっていることが分かる。つまり、単に仕事でELFを経験するだけでは教育の過程で慣れ親しんできたネイティブモデル以外の多様な英語への対応が現実的には如何に難しいかを表しており、教育の場でのENL一辺倒モデルから多様性への脱却の必要性が示されている。

同様に、若手の20代ビジネスピープルの意見にもENL志向的意見が見られる（以下参照）。

### ■20代のビジネスピープルのENL志向的意見

- 回答者8 (BP24-20-U-JP (jpn) -C (J) -BT (Y-Various) -BS (N) -SA (Y-US2-primary school-2-4grade, US1-university) -EMI (Y-partially))
  - ・ 仕事相手の英語 (Q6) : 「私が慣れ親しんだアメリカ英語を話されるクルーはおらず、タイ語訛り、シンガポール英語、中国語訛り、ドイツ語訛り、の英語を話されるので、聞き取りが少々大変」
- 回答者9 (BP16-20-U-JP (jpn) -C (F) -BT (N) -BS (N) -SA (N) -EMI (N))
  - ・ 自身の英語 (Q5) : 「拙い」
- 回答者10 (BP22-20-U-JP (jpn) -C (J) -BT (N) -BS (N) -SA (N) -EMI (Y-partially))
  - ・ 自身の英語 (Q5) : 「未熟」
  - ・ 仕事相手の英語 (Q6) : 「未熟であるものの、自信を持って発言する」
  - ・ 同僚の英語 (Q7) : 「発音は良くないものの、正確に英語を話せている」

上記回答者8は、日本の民間企業で働く20代日本人ビジネスパーソンで、海外駐在経験はないが、出張経験は数多くある一方、留学やEMIでの教育を受けた経験はない。仕事での英語コミュニケーションの相手は「多様。アメリカ、ヨーロッパ、アジア等」(Q2)と回答するも、仕事相手の英語については、ENL、特にアメリカ英語以外の多様な英語に対する不慣れを指摘している。

一方、回答者9は外資系企業で働く20代日本人ビジネスパーソンであり、海外出張、駐在、留学、そしてEMIによる教育経験はない。自身の英語について「拙い」とする一方、同僚の英語については「臆せず話していてすごい」(Q7)と回答している点を考慮すると、自身の英語についての評価はネイティブ規範に囚われている為である可能性が高い。

また、回答者10は、日本の民間企業で働く20代日本人ビジネスパーソンで、海外出張、駐在、留学の経験はないが、一部科目においてEMIによる教育経験を持つ。仕事での英語コミュニケーション相手は「アメリカ、中国、台湾、韓国、タイ、ベトナム、フィリピン、シンガポール、フィリピン、インド、マレーシア、ロシア」(Q2)出身者と多様であるが、この多様な国出身者の「発音の訛り」(Q3)に難しさを感じると報告している。同時に自身の英語を「未熟」、仕事相手の英語は「未熟であるものの、自信を持って発言する」、同僚の英語は「発音は良くないものの、正確に英語を話せている」とも評価している。この同僚の英語への、「発音は良くない」という評価は、明らかにENL発音を基準にしていると考えられる。また、自身及び仕事相手の



英語が「未熟」であるという評価の基準もENLであるといえよう。

以上、ここまでビジネスピープルの英語への意識差について具体的な回答を提示しつつ紹介してきたが、ELF志向的な意見、ENL志向的な意見とも、特に世代差やEMI教育経験有無とは関係なく観察された。各人で質・量ともに多種多様な経験をしており、また今回の調査数も限られている為一概には言えないが、世代やEMI教育経験の差というよりむしろビジネス現場でのELF使用経験の(質・量的な)差が英語への意識差に繋がるのではないかと考えられる。以下に提示する若手20代ビジネスピープルの、同僚の英語に対する意見にこの点が集約されている。

#### ■ ネイティブ規範にまだ束縛されているが、ELF志向的意識も見られる例

- ・同僚の英語 (Q7) : 「発音は良くなくても、親密にコミュニケーションをとっている人が多く、感心する」(BP20-20-U-JP-jpn-JC-BT (N)-BS (N)-SA (Y-US5-childhood)-EMI (Y-partially))
- ・同僚の英語 (Q7) : 「未熟であるものの、自信を持って発言する」(BP22-20-U-JP-jpn-JC-BT (N)-BS (N)-SA (N)-EMI (Y-partially)) (再掲；上記回答者10)

上記2つの回答には、ネイティブ規範に依然として囚われている側面を示す部分(下線)とELF志向的な意識を示す部分(太字)が混在している。同僚の英語を「発音は良く」ないや「未熟」と否定的に評価している一方、「コミュニケーションをとっている」点や「自信を持って発言する」点をより高く評価しており、前者は更に、同僚の多くが「親密にコミュニケーションをとって」いて「感心する」と相互理解の重要性にも気づきを示している。また、以下に提示する20代ビジネスパーソンは、現場での英語コミュニケーション能力をビジネス知識・経験も含め幅広く捉え、いわゆる狭い意味での「英語力」(linguistic competence) だけでは不十分であり、コンテキストに即した知識・経験、多様な言語背景の交渉相手との柔軟な対応を含めたELFコミュニケーション能力(いわゆる communicative **capability**-Widdowson 2003, 2008, 2016参照)の重要性を示唆するものである。

#### ■ 英語力自体よりビジネス経験が現場のコミュニケーションでは重要

- ・同僚の英語 (Q7) : 「英語能力そのものより、ビジネスや業務に関する知識・理解が深いの方がビジネス現場では英語コミュニケーションが取れている」(BP23-20-U-JP-jpn-JC-BT (Y)-BS (N)-SA (Y)-EMI (Y-partially))

上記の一連の意見は、下記図5が示すように、ビジネス現場でELFコミュニケーションの経験を積み重ね、ELF志向になる傾向があることを示していると言えよう。

しかしその一方で、図5が示すように、また、今までに紹介した意見例に見られるように、単にELF経験を重ねただけでは、潜在的に英語母語話者(ネイティブ)規範に囚われている状況は根強く、簡単には消えない可能性もある。多様なELFコミュニケーションの経験を積んでいくことの重要性はいうまでもなく、また、グローバル化が進む社会ではそれが避けられない事実

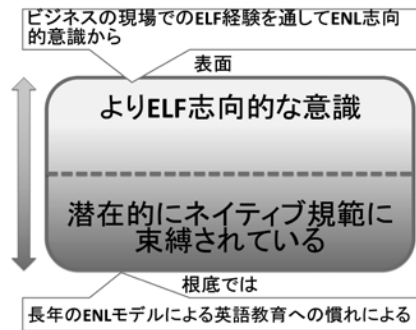


図5. ビジネスピープルの英語に対する意識

でもあるが、社会に出る前の学校教育の初期段階から現実社会のコミュニケーションでの多様な言語使用の状況を見据えた教育の在り方が問われよう。また、特に高等教育ではELFとWorld Englishesの視点からグローバル社会における英語の位置付けについての理解を深める機会を設けることが重要になってくると考えられる。

#### 4 おわりに

グローバル人材育成が声高に謳われ始めてから既に10年以上を経過しているが、グローバル化の中で問われる言語教育、特に国際共通語として使用されることの多い英語使用の現状はあまり理解されることがなく、「国際共通語としての英語」はグローバル化に対応した英語、つまり、ELFではなく、旧来からのENLをモデルとした「英語」であることが無意識のうちに前提になり、言語政策でもこれが「グローバル化」の掛け声に如何にミスマッチしているかを深く問うこともなく安易に「英語力」増強と結びつけられてEMIが促進される側面もある (Iino 2018, Murata 2018, Murata and Iino 2018も参照)。

今回の2017年度調査結果及び考察を踏まえると、今後の大学でのEMI教育に関してはグローバル化の現状を踏まえたEMIの理解、つまり、多様な言語文化背景の学生、教職員が共通語として英語（つまりELF）を使いながら実施するのがEMIの授業であり、「E」の在り方を正しく理解した上でEMIに臨むことが更に教育の質を高め、ひいては受講者の満足度と自信にも繋がる可能性があることを理解する必要がある。具体的には、EMIを通して多様なELF使用機会を設ける、つまり学生・教職員の更なる多様化を図ると同時に、過去の調査でも明らかになった、このような中での学習内容・理解の確保、授業形式の更なる工夫、学生の英語力差への対応、FDの充実等の対応策も必要であろう。それにも増して、EMI実施においての「E」はELFの「E」であるという認識を深めることが急務である (Konakahara, Murata and Iino 2018も参照)。

最後に、EMIコースを提供する英語英文学科では今回調査時で新カリキュラム実施2年目であったが、学生のEMIでの英語使用への意識に着実に肯定的な変化（ELF志向的意識）が見られた。しかし、本調査はアンケート回答分析結果に基づいており、実態解明には詳細な授業観察と分析の必要もある。また、ビジネスピープルへの調査ではビジネス現場でのELFコミュニケーション経験が英語への意識に差をもたらすことが判明したが、本調査の情報提供者数は限られて

いる為今後より多くの数及び多様な教育背景を持つビジネスピープル対象アンケート調査の実施、一方で、実際のビジネス現場でのELFコミュニケーションの録音調査・詳細分析も必要であろう。

**【付記】** 本論文は早稲田大学教育総合研究所一般研究部会（B-7）「EMI（英語を媒介とする授業）経験に伴う学生の意識変化と「共通語としての英語」に対するビジネスピープルの世代間の意識の差、および英語教育への提言（代表：村田久美子）」（2017年）の研究成果の一部である。

### 参考文献

- Ball, P. and D. Lindsay. 2013. Language demands and support for English-medium instruction in tertiary education. Learning from a specific context. In A. Doiz, D. Lasagabaster & J. M. Sierra (eds.), *English-medium instruction at universities: Global challenges*. Bristol; Buffalo: Multilingual Matters, 44-61.
- Cogo, A. 2016. Conceptualizing ELF as a translanguaging phenomenon: covert and overt resources in a transnational workplace. *Waseda Working Papers in ELF*, 5, 61-77.
- Cogo, A. 2018. ELF and multilingualism. In J. Jenkins, W. Baker, and M. Dewey (eds.). *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca*. Oxon: Routledge, 357-368.
- Dearden, J. 2014. English as a medium of instruction – a growing global phenomenon: phase 1. London: British Council.
- Ehrenreich, S. 2016. English as a lingua franca (ELF) in international business contexts: key issues and future perspectives. In K. Murata (ed.) (2016a), 135-155.
- 外務省. 2016. 海外在留邦人調査統計 平成28年版（平成27年（2015年）10月1日現在）  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22\\_000043.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html)（2017年5月15日アクセス）
- Gundermann, S. 2014. *English-Medium Instruction: Modelling the Role of the Native Speaker in a Lingua Franca Context*. University of Freiburg.
- Iino, M. 2018. EMI (English-medium instruction) in Japanese higher education: a paradoxical space for global and local sociolinguistic habitats. In K. Murata (ed.) (2018), 78-95.
- Jenkins, J., Cogo, A. & Dewey, M. 2011. Review of developments in research into English as a lingua franca. *Language Teaching*, 44, 281-315.
- Konakahara, M., Murata, K. & Iino, M. 2018. 'English'-medium instruction in a Japanese university: Exploring students' and lectures' voices from an ELF perspective. In K. Murata (ed.) (2018), 157-175.
- Kubota, R. 2016. 'Language is only a tool': Japanese expatriates working in China and implications for language teaching. In K. Murata (ed.) (2016a), 156-179.
- Ljosland, R. 2011. English as an Academic Lingua Franca: Language policies and multilingual practices in a Norwegian university. *Journal of Pragmatics*, 43, 991-1004.
- MEXT. 2011. An Interim Report of the Council on Promotion of Human Resource for Globalization Development [グローバル人材育成推進会議 中間まとめ],  
[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan\\_matome.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan_matome.pdf) (Japanese)  
[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011interim\\_report.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011interim_report.pdf) (English) (accessed 29 March 2016)
- MEXT. 2014. Press release 'Selection for the FY 2014 top Global University Project' [平成26年度「スーパーグローバル大学創成支援」採択構想の決定について],  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/09/1352218.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/09/1352218.htm) (Japanese)

- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/09/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/07/1352218\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/09/_icsFiles/afieldfile/2014/10/07/1352218_02.pdf) (English) (accessed 29 March 2016)
- Murata, K. (ed.) 2016a. *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: conceptualization, research and pedagogic implications*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Murata, K. 2016b. ELF research – Its impact on language education in Japan and East Asia. In M-L. Pitzl & R. Osimk-Teasdale (eds.), *English as a Lingua Franca: Perspectives and Prospects. Contributions in Honour of Barbara Seidlhofer*. Berlin: De Gruyter, 77-86.
- Murata, K. (ed.) 2018. *English-Medium Instruction from an English as a Lingua Franca Perspective: Exploring the Higher Education Context*. Oxon: Routledge.
- Murata, K. and M. Iino 2018. EMI in higher education: An ELF perspective. In J. Jenkins, W. Baker, and M. Dewey. (eds.). *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca*. Oxon: Routledge, 400-412.
- 村田久美子、飯野公一、小中原麻友 2017. EMI（英語を媒介とする授業）における「共通語としての英語」の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言. 『早稲田教育評論』, 31, 21-38.
- 村田久美子、小中原麻友、飯野公一、豊島昇 2018. EMI（英語を媒介とする授業）とビジネス現場における「共通語としての英語」への意識調査、および英語教育への提言. 『早稲田教育評論』, 32, 55-76.
- 日本経済新聞データディスカバリー (2016. 7. 18) 「生活費・教育・日本食… 海外駐在の実像は」  
<https://vdata.nikkei.com/datadiscovery/15col/>
- Otsu, A. 2017. The gap between educational policies and actual workplace communication in ELF: a Japanese case. *European Journal of Language Policy*, 9, 105-118.
- Seidlhofer, B. 2011. *Understanding English as a Lingua Franca*. Oxford: Oxford University Press.
- Widdowson, H. G. 2003. *Defining issues in English language teaching*, Oxford, Oxford University Press.
- Widdowson, H. G. 2008. Foreword. In K. Murata & T. Harada (eds.) *Applied linguistics and language teaching in Japan: A Widdowsonian perspective: Explorations into the notion of communicative capacity*. Tokyo: Hitsuji Shobo, 1-6.
- Widdowson, H. G. 2016. Competence and Capability: Rethinking the Subject English. In K. Murata (ed.) (2016a), 213-223.